



曉
基
句
集

下



13
 文和 856
 號 2

曉臺先生發句集下

秋之部

日くくしれと物しも物ぬ秋と来ぬ
 常の所着うこれや今物乃秋
 出ろくと物り知るる露のあき
 芝あれ葉拍子とえてまの秋
 初秋やなまして秋の静なる
 夕の秋死しよす一人よあふ
 知多の浦一葉多小やとて
 きよとよし秋ととてれと位の静

句集下

二



史抄よりあまうらと可く

秋二日身となく風も峰ハ亭と

・秋盛まよあまうら時

うつさこの現も秋とく日や那
萩桔梗星も傍身く時とぬぬ
麻ひめれとく一星も 傍小袖
玉簪のまれく 逢世星の祓や
峰のく由縁なまの落女七少
鹿尾土も娘もらるるま此川
にままうら 海も 朝や 朝海

戦ふあまきなまのま けく 逢
雪のや玉簪の子も星もまうら
廿年あまのまつやけく 逢
けく 逢や星と峰も身もまの
星あひやまのめく 逢 不二流波
七夕や星も大まのま 逢 逢
ままのま 星も一星の名もま
けく 逢や心のまを伊勢小所
病もたままのま 逢 逢 逢
星 今 言 夢もくまのま 逢 逢

酒星あけと比し酒泉をくしや

七夕やほしほしとほろひ

庭の袖や裂らすわ、終星

明しや七夕のめれ圓の雲

列も星今を本隠ましく又中さう

出くせく天候の霜は園をたうてうき男れ若く

くははようくかかきとさしとよや星の夕小

男心ゆき

りう帆はほしやまづは月若

星此精や八日よさひる 白芙蓉

文月十日よ

中將の君うをさせまひをれを殿のら灯をそし御う
身望し致ひ懐しを懐して出しとまらなり

花しちへく月なま 無となしおき

叶まらう 有つの人れ 金まら那

金まら 夕うは汁か 乞ま忠

懐れ子や何となくとも 金扇

金扇 たり柳しをきれゆあへのやうう

歌謡柳 扇尾 草や芽まうらるる露もれし

英しや月此中折る 金の人

白集下

三

魚乃月市に際し 人と非
 道りやなまの海に伝音浦
 絶えり 舟は地よきこれ夕に
 静さや町なま里に燈籠
 ほくくとる見よや 燈籠
 灯のひき川をゆれとおきる人
 まろりまゝ 酒酔してをやま
 屋橋へ流るうら山田一ふとやういふ
 好の風 三井の鐘よりきこふる
 秋の 勢や 雲の 影の 浦の 山

清山秋の村喜風落ふとたも

秋の勢の吹りつげくもきき山
 葉よ 露の 蛸の いそきやあきの風
 あき風や 雲の 影の 浦の 山
 秋の 勢や 雲の 影の 浦の 山
 霧の 雲に 峰の 影の 浦の 山
 あき風や 雲の 影の 浦の 山
 市より 網の 尾の 影の 浦の 山
 井澤とてはより 舟の 影の 浦の 山
 きのこれきたる 舟の 影の 浦の 山

人もあつとみさう疎越てあやき田舎よと

猿啼のむすひめきれく秋の風

室中 切角と壁分 進める 猿杯式

右中於城破さく酒種は合う湯の海に沈くと伝説ハ

種を多うし 浪をうれと秋の聲

本音吉峰 水ハ日の西よ 落 希とあきれたる

鹿谷慈光 弾もハ洞とめうして入く三平 餘所を音れ中よ

江とくくしめ 楠成る三男成り希入る 禮正 徳別よむうて

風も清言よ終るとくれ家のこ

雲 起 ち 寺の と 野 秋の 夜

梅書 証の 弦より ねつ 万 活る 心 中よ 一 卯

露 洒く さき 人の 露 可 ほや 夢の 夜

和衣 亡人 中 誦 せ 爰 尼

逢ふ と くれー 夏 終る の ち 秋 を 可 も

湯茶の 鶴よ 仮小 かり 厚く 月を 空 ぬ 傾 ぬ 累 了 と 元 の

ゆー 一 匹ー あく 一 聖 れ 君 引 ち 多 思 又 其 の 玉 わ ち 心 止 じ

人こ かく そ 房 寸 息 盡 一 ま 一 一 耶 一 と ち や ち 秋 なく ち 心

不 善 好 語 なく 理 智 とな ち 外 一 ち 心 止 ず 一 此 一 秋 の 粒

つ ぎ ち

ち ち

まよふと 函聖ハ 度れき 玉珠のやれ
とよの 露す名此——つくやを木槿

日の馬や 一両跡のやれ とく声

夢少よ 死人坊や 花木槿

二日岷 木槿とけりて あき亭——

白木槿 糸瓜此中へ 岷工たり

木柳 柳ちりや 少—— 夕此日のよより

佐濃のそ下り 甲斐のさくま入

川風うらけりも けりをみぬ——

女前を 秋の身とらつ ごとく 小きま 女前を

をいれ—— あやうき 雀の 歌り

何坪園 越下ふを 法と—— 琴の 曲あや—— きてを 妙なり

夕う 撫む 和の ちんを すきうく—— とき けり 身を とを あめりを

みづきは ぬむの 門を まれよの 露を 飛ん—— 式八 同窓

情を 勤う—— 忽 困 難の とくふ つ—— む 明 世 八 必 玉 槿 上

あさう 不 此 葉 とも ずと けり 望 の 爪

相鳥 舞 々い かな けり ます ぶら 茶 二 郎

とせ 綫 風 色く 朝の 活の さかり け

けり ぼの 花を けり けり みゆれ 舞 山 家

あさう 花を けり けり けり けり けり

拙のこころ

落きく 擗ま 聖のたよりか
時上り 月 色 此 世 上 希 い 人 事 あり あり
月 色 月 子 の 色 天 々 あり あり あり
月 色 天 々 あり あり あり あり あり あり
伊勢の山田のふもと 山 々 あり あり あり あり あり あり
のりやまき あり あり あり あり あり あり あり あり
夕のまき あり あり あり あり あり あり あり あり
色 あり あり あり あり あり あり あり あり
音 あり あり あり あり あり あり あり あり

山中

芳 日 ぬれ 下 泉 池 あり あり あり あり
芳 まる あり あり あり あり あり あり あり あり

亡母を送り

芳 標 今 や 昔 あり あり あり あり
収骨 骨 肉 あり あり あり あり あり あり あり あり
初七日 衣 九 品 の 打 あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

右妻中

萩

風をくく 藤の名山 日のうきり
 可勢なりや くらひさ 萩のほの白
 あり 磯や 水おし 磯のし 藤のさ
 糸みく 萩のり 越の 越の 萩
 才き 糸や 萩と くれり 爪さう
 小比丘尼の お打て 打ち 萩の
 一巻 とめて 向ふ 萩の 萩
 萩板 萩て 何き も 萩の 萩
 大の 萩の 萩の 萩の 萩

偶成

指楨

芭

けくくと 萩のうけ 萩のうき
 色もれく 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき
 萩のうき 萩のうき 萩のうき

集巻下

萩

上総の園をり柳一ヶ山をこつて河上舟の末人の
古唄しあふや、さる山をこつて舟のおもひすく
りく

きく此葉の水より引くや月をこれ
暮たきてお尋尋るる漏り卯
垣の清く漏るぬ屋らまの葉
つゝお尋ト戸を修るる庭外
もくくしや 明る方一鳴りつる
柳のなけも 秋さこれ不意ぬ
日くしこれなけもつゝくををる

寒清浄の蘭よりあふる午時一睡清閑よ入

秋の蝶 日の暮らふ清くせ
あきの枝や暮れ柳のあとり
死ぬ日とをり秋の
の鳴やとくくと病乃玉
やあひするも 病の
やあ居とくまきくす
す日のさけまの古びる
と 秋やまきくす

寐さすしやゆをなすきもきくくす
うらるる 佛の飯や 糖 碎
ま出く 涙きはあはむのそ
萩あしとあをゆき虫のそ
覚やあも 萩よむしゆのそ
たふふやあ 押しう 萩虫のそ

常盤塚とて

虫の音や美人のぬいき、けう
秋れましと 虫けうの音あり

亡母三四忌

ふのしりれきよ 喪葬思ひが
くしに虫いつらるきしもの音

秋雲

あし 流や波と 離れて秋のそ
萩のそ味の松と 満ちる

秋水

あきれ水うるのよなるま
茫くと 芭 折声は 萩の水

黒血川

かくとく 萩の色きとあきれ
二日 嘆 木槿と折て 羽衣し
萩をし ちあくとれハ 袖の浦

紅葉

よー田山中砂をなといつる不ハ裾の〜〜家つら〜
杖〜竹芭蕉翁武陵天和の夏よあひて替弟錫あり〜
此あ〜〜たり

山中にて

山人の願とちるむ〜〜書

川口より

替ひあり水柱は〜ハ院は矣 全

去 事務の替村百系と〜〜 全

是等の心と〜〜百系を〜〜に〜〜を〜〜山深く入て

杜宇〜〜日暮の〜〜袖よけ〜

是〜〜被よ〜〜を〜〜を〜〜して〜〜老樹枝乾て自〜

杜宇〜〜去とむ〜〜其具是すれ

藤の中を物〜〜や〜〜東海を

梅沢の〜〜門家

は〜〜娘と〜〜みめあ〜〜き娘のい〜〜を〜〜たる〜〜あれ〜
〜〜あ〜〜た〜〜た〜〜た〜〜あれ〜〜織姫さ〜〜のあ〜〜よ〜
〜〜の〜〜は〜〜あ〜〜て〜〜色あ〜〜様の〜〜翅〜〜け〜〜玉〜〜び〜〜れ〜
〜〜玉の〜〜終〜〜も〜〜そ〜
〜〜た〜〜あ〜〜た〜〜て〜〜し〜〜只〜〜その〜〜終〜〜く〜〜ん〜
〜〜あ〜〜れ〜〜ハ〜〜あ〜〜れ〜〜ハ〜〜あ〜〜れ〜
〜〜な〜〜く〜〜て〜〜が〜〜と〜〜い〜〜つ〜〜る〜
〜〜あ〜〜れ〜〜ハ〜〜あ〜〜れ〜〜ハ〜〜あ〜〜れ〜
〜〜さ〜〜の〜〜あ〜〜れ〜〜ハ〜〜あ〜〜れ〜

世人のよきあはれをいへて述すまじきこと

世人のよきあはれ

志とくとおきき松のあやみ
 幸なるぬらたきや松の秋
 松の葉の板をときる夜を
 海をき雨や松の瀧を
 新えきて松をき松の松を
 松の色 野中の松はよひと
 あきあやや松の松の松を
 秋の山 ところくう 烟

きのこ
 雨とや 松の山のとくう
 松とよ 松の山のとくう

八相
 ハ約ヤ 松と 森とらよの松

相撲
 神妙よ古き代よ 角力士
 乳殿 風情よ 角力士
 空うれハ 松とらよ 角力士

ままひくく死なく論まう伊達れ本戸

三日月塚懐古

大寺社の於就院々ハ悉皆頑度佛地と区して釋粟畝と
今と彼三日月の碑ハその隅に押入うしるさるすあさる
かとりとまゝ見て

あさるとに取とくさる三日月

蜀黍の穂そよた汐竹をれと

六祖讚 ころ月れ克 ころく 精米

八幡宮千年法楽

まみこや月ふく竹まんとくこやま

月 根の吼うきくく月うい

月みてありきく浪以

今この月雲井の籠るんあれ

稲生 月と黍と物たよ以またこ

仲秋青月や雲法よりきけ。雨の聲

月の匂ひとらうるれ言砂子

うらむれと誰かきく今この月

大さハ美女なうきく月れま

夕ほも地よ是く月のと音か

月満くまきまれふのすくく

折若くは萩垣はく月又か
 田原乃くひあけりて此月
 酒影の蛾来もくくくく月の
 人走くあそりしてきよ此月
 社乃又さく水の月報くれ
 石山やのく平出る此の存
 さとくくの角くけてや家の月
 地とくくの懐せきくあき此月
 大空や月をくろのくよ
 月又して好く世くき山の上

雲とくやくくくくくくくく
 月の隈十国の柄此月
 月此柱くむけく又あき此月
 月千里月くくくくく此月
 水波 月とくくくくく海とすむくく
 地志 人といくくくくくく水の月
 良夜満無川系も宮く水のまきく

月くくくくくくくくく

望月鞍上今

おすゝや 望の後よ 夕の月
湖の面も むらうと月とうら

仲秋のむらうのぼりて

更山と 夜まなり 夕月

口すきとよ

あゝ〜 吹まれば 夕月とらうら

夕月入らも 二むらうのやぶ

大身ハ又よ夕月を母と共ふも 小仲秋妻の夜

思ふ 夕月 夕月 夕月の月とらう

おすゝの月と対すれハ夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月の八九ハ七夕をせやありかきとた〜 夕月とらう〜

夕月とらう〜 夕月のぼり〜 や月れ夕果を〜

夕月や清光の名跡を〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月のぼりも源〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月とらう〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月とらう〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月のやま〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月とらう〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

夕月とらう〜 夕月とらう〜 夕月とらう〜

今集

十一

中天とよむの月れむけは
 ねまゝに ねまゝに 喜ぶ月の歌
 子猫の音や 夢と一重の星徒然
 いかに 月の一や 月こつるも 煙のふひさ
 世徑 月一と 小柳をのけり いたこ丸
 杖の 山崎の背中 干かき 杖の面
 杖の面 雨 柳弓の糸よ なくねむ
 ねの面 ほひも 志し ぬれ扇
 杖の 乃く ぬき へほよ かつら たり

信濃の道より 甲斐のふよ歩をと引ちんくり 智を花田の
 ら 歌里の事以文して 忘れ家 婦人なまは 尋ね 其夜くらも
 あま八月と見えそや 今こころ ねくそや 色を此夜もあま
 ねふ 土筆の如面 さらく ねいひよう さらなる

うね ときく まり 月れむけは
 と 守り ねまゝに ねまゝに たもえこも 夢のなと 終るは
 ず ねまゝに ねまゝに ねまゝに

あふをき 市川も ねまゝに ねまゝに ねまゝに
 新夜三あま ねまゝに ねまゝに ねまゝに ねまゝに

今集

十一

室守障てお見え

秋の表 三人の籠やこころぬ

甚好も巨勢大細之の画を秋初之の賜のう〜と手紙の表
名と〜〜けそあよめ度登なり〜河村の神社甲府の
系〜の〜ま〜山の道よた〜と〜こ〜ハ〜見〜ま〜て〜信〜我〜必〜後
田のおぼし神と一神よた〜〜ま〜は〜新法の〜〜た〜〜も〜ぬ
〜〜〜程有〜〜〜炎〜てぬ〜ま〜

小^{ヨリ}墾田れと〜の初種くもあれ

客中 系 ぎけと〜と〜り田と〜と〜〜

甲斐の國市川なる芦南ま〜と〜〜や〜れ〜

るの浮世川を月れ出つ〜も〜すあ〜た〜〜
うつこの表坐高木門〜た〜も〜不亦感あり

る〜き 秋の〜〜根と厚〜

甲斐のふを〜〜り〜せき山中〜や〜

いつの世はとありと志の〜命の〜
〜〜つ田の月よが〜
いふの表字そのほ〜と〜〜
お〜口〜〜い〜も情ある〜

そ〜れ〜 輪のさ〜ら〜

東方天の極ま〜や海の極ま〜や神と〜

るくん仙とよもさうく

星のまきまき 月

途中 吟りまきハ渡田に子橋田橋とゆ

ゆりや 渡田とまき正橋のふひき

橋のまきれ移りてまき又佐の聲

引箱の田きとまきむ 彦根か

ゆきまきまきまきまきまき

川橋の名とらとまきして 潮来船

まきまきまきまきまきまきまき

毛山 田尻の小柳まきまきまき

彦崎のまきまきまきまきまき

鏡の尾れまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまき

又まきまきまきまきまきまきまき

まきまきまき

まきまきまきまきまきまきまき

杖取 杖のまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまき

あきの夜や 橋こけまきまきまき

杖のまきまきまきまきまきまき

舟橋

舟橋

形れよや心そくの然るその
あきの萩やゆき 摺一箇の孔
秋乃夜ハ梨子此齒牙の言さ
好のよや杵おし割る炉のあ
玉むしの 滑るうひあり 萩の秋
あきの萩やそるごと 眠く君々門
とよめ子々 沙衣おる 形れ石
を 萩 萩の おとよ 園ゆ 庭し
西谷の衣る門 萩や 焼る 草
山姥とみし人きして きて 萩

持衣

馬

標の隈ぬけり 萩のやき礎
うわく月見つ、あれハきぬさ
也しきハ上をなすしきよきぬさ
萩おるつれなき人と暮る 萩
南おも 初るのちこれ存すなり
より馬の信徳よかゝ萩をきし
細くや言萩と在右一留之萩
きそめし 萩く 礼きく 萩の馬
ま山や身とらけきく 萩れく
礼厂となるや 萩のまうつと

の集

の集

今集

三十一

やうくとまあうう小田の丁
京らうき山ううヤわうう鳥

夕あきう 晴の目うやく誇純し
たのれ乃う金う 興の眼うう卯

うけあまう 遠れてうう 晴の尻
犬葬の言うれうう 杖の言

鷹の眼れうう 雉うう 好のれ
好烟とよを影うう

人の上う 烟うきう あきの言
象浮やいのられうき 新れう

梅干て酒吸ふてう 水の言
山鳥のさうハ麻のわううも

麻の言うとそれのまうれう 卯
これてや海漱えうう 麻の言

あかうう 村うけうえん 萩の麻
みけ格もむう 院う麻の言

麻の言う 引張う差れうう 卯
閑生に思 あり夜玉うう 麻の言

病麻やう 穂う 明の言
麻造うう 院 聲う 雲と 羽

尚葉下

三十二

竹下

三十一

列麻 霜の送山 ころろ なる

ゆれ 糸よ 有明の月 ねむろく 止

九月新 吾初て知命の口をばいよ 蓬宮へ 信つ川のほとり

とつ 極ひの 刈て 是せ 死きて 千尋と ぞそく 傳うてや

とて 又 春ハ 續き 橋むし あり

菊の丸 抱大津四郎

きよの 葉 かな 世の 秋めろく 止

きく 此日 ほえ する 湯く

雪舟、 華の 毛、 葉乃 疾

籬 葉 や むの うろ せ 一 百ろ

山 風 や 板戸 たふきて 葉の上

應 きて や 只一 ともり まけり 止

み くれ 笑 葉 打入る あり 止

白 菊 とも 露の 泉と とも あり

春 きて くれ おな 色と あり あり 止

初 葉 月 ちり け くれ 竹と ねむし 止

形 百葉 葉の ちり 香 糸 あり 葉ハ 只一 種

ち くれ ちり ちり 芳 葉 針 あり ちり 止

燈 ちり ちり ねむ ねむ ちり ちり 止

鳥 ちり ちり ちり ちり ちり ちり 止

竹下

三十一

十三夜の月ハ夫他の擧げ下ニ抱ひてうの上より燈の四光ハ
そあまハおとよとらもき 管と松と今石州の白鹿
林野 人竹ニ射るのみ

杖の花 氣ろく 午一 后乃月
后此月 すむらゝん 表の月
月の糸は 冥きあは 菖 枕
のち此月 冥きあは 菖 あり

十二夜戸極の涼ニやとら

月又ゆきは 軽小 抱ひじ 達ゆさ

古園百里をきて在あるのよとら 二とさの杖あふふ

九月十二夜かりう

古園百里 夕 香 夕 月 の 寄

九月十二夜もおとよとなりぬと膏此情無うとけのよとら
ぬと舎中此ともかたなりたよかとも 料理川の支流
のよめと宿をそくよ古園の感あり

水日 抱 小 せまりてのち此月

十三夜ハ亡母と七日あり

后の世此月なるハ母の氣もさせ
末枯 ううれや 毎日小 むり小 魁の指
何事此 末りれまそをれ 玉と何

葛

秋の—母

葛は葉や 篠田男の 繩と帯
 へきの葉を たるく けり 林の露
 うん ね葉 きのよ 又き ちりす—め
 つゆ 狂僧 帰— 夕とみち
 何みくも ね葉と松よ 梅り ぬ
 お葉 葉や 繁りて 赤くも あり
 夜ト先 又人 夢き— 柿 ね葉

夢芝の画談

木倉の 早け入りや 秋のいろ

三浦氏 埴本を 訪ふ

先つ又 入き 不 柑子 此色 又いれ
 途中 葉の 葉よ ぬき する 日 赤
 子東 三四 局

この 雲よ 中の 七日を たより ねえ
 木倉 葉の 産衣の 種れ 木の 葉に
 夜も すすろ 嵐れ つく 夢 くら 那
 むつろ や 葉 蔓よ かり 葉 葉
 葉 蔓 此 木の ちり けり 甘子 赤

活の 葉子 主人 幻住庵の くり 麻 訪き 時

今集

十一

丸蓋の推しむし〜れきすむ〜き〜

か〜て月と松の山と〜分作。

見かかひま〜し〜事〜さ〜し〜月〜

か〜おれ〜き〜い〜す〜経行〜〜肩〜

焼子入受〜え〜さ〜目〜

咲の舞す〜き〜九月城

秋雅 秋暑〜水丸鳴方北湖む〜

銀〜し〜れ〜柄〜れ〜り 雲〜

ちれ〜つ〜方きあ〜中造の幼〜

世政のる 刈藁稲ありれ〜

鳴 鳴 や 麓 山口の つ〜

菊 妻の花 高 並〜昔ぬ 不破の雨

鏡 とき 花 の つ〜と〜

む〜雨を 面白〜

草 為〜 竹 葉 又 なるて 贈の草

ゆき 園は ぼけ あり 老の みさよや 竹の妻

さ〜 結 や っ〜

水海夕陽 秋の る〜 星〜ち 運行 あり

屋 結 や 源の 園は 伏むまで

老階橋よせり〜存ひ白川の 雲を〜

今集

十一

見ゆ かけハ 芥子腐也 昔昔
志望の山あせんとあまね色工万念入つて葉狗戸
わくくくとぬき 獄子出つ

志 陀 吹 石 の 古 色 風 丸
新 権 や 岩 比 屋 け め の 日 よ う と き
と せ 城 景 工 落 り 了 々 隅 々
山 中 や 別 當 庵 の こ と 一 煙

遇 身 史

旅工囊をひてまると海をまて舟ひきまると体工舟ひかしく清り
して客一かそあへん下り世なるとあへんたつてや人々

金銀を面を思ふ銀盤工か金銀を思ふむしを事と一筆思はる工
ゆるとろひて見せき書一ひをわつたるあふひははる工
舟のほく や 首 横 控 舟 小 舟 舟
うらまのたもしく木母さういきて佛を工あをれ取れ
まゝ入のうり日と人といひるはる工精い心野まはる工は首の
かゝるなる工

本 母 寺 北 灯 下 入 る 舟 の 方 舟
舟あつたもはる工や工一清れもはる工
舟一とんも一うの端のやうとて外ぬ工更のひさえハ
中しつたもはる工望れ又工のまは古壇工詰つ

みの出を撃こなるん 音ありま

すい川のそりかましくいしと志のひととをいふより
人くか歌くもあれく

日もあき、たをきいてかよ、なく

十月廿日あり八日の晩りまるとあつたの月やあき
すのほま秋のそ跡も一はあつたあき

ほのくさを名跡と見ゆ、秋の月

書秋 泣願ふて一人きりあきと

秋の名跡 山田の馬もいふあれや

あきあき 夕日のあきよ 小西

あきあき 秋をきいてあきと秋ハ

あきあき 秋もあきなりあき

山風や 免 舞はく 九月

弥弓の 弦引きし 九月

宗且 大工 九月

九月 足 遙り 能也の 坤

冬之部

新きやニツ子 若くはせり
 湖上吟 鹿も又初を此やうも耶
 冬此日のさー入夢の白ひが
 鳩の巢此あゝかろうーこれあ
 ーこれあゝあゝかろうーこれあ
 漁父画 籠のさろもさーさーとこれ
 志これりめくたき成葉 望を 踏を
 一ちこれ 烟を吹きくり 時百
 ーこれり 果ら一ちのけさうさ

冬之部

鐘の音やーこれ降りあゝあやま
 ーこれろり尾根のすゑもさひ葉
 了くと杉れ日面りーこれ
 夕川や 夢のーさるい 時百
 さー残や 凍り時百のぬれ 茂
 冬之部
 仲の雲ーこれろり 長崎山
 冬羽田よは時百さるーさ葉 松
 海星あまの地へ海をさるい 隔て泥のさるー
 船よのほろ ちつき交丁ーさる

わらわむせ田舎のまじりてのく

孫 糸よめ此れおとあは兼の跡あり

義仲寺菫翁牌前

ちかよふて思ひの事 地云尺
くふれ今い月よりはのくれ尾花
表の房 法座 まはひよ 枕中
雲ハ——くれ 徳もまの 威も伏
降子も下 鳥も 蝶も 音も日
舞の花つむ——の 嵐う那
表吹く 雀むらた 鳴るは

霜

途中

はやくと柳も表れふ秋
霜満る ねたを 捧の 白ひれ
霜より 草鞋の つたを 鳥——り
——と 悔 毎に 空移の 音——
空谷を 舛 くれく 空谷の 表よ あり くら
表 枯より 幸此 形も 中の 朝くら
り 煙も 茶 鐘 終り する 霜 表ハ
美人の 字 扱 あり 霜 の 国
ね——り る 雲 流 亭 表の 流 町 中
る 人 と あり—— 表の ぬれ 町 中

大皇栢石 草よくも 生さる 雲のすり衣

曉や 緑の風よーも乃海

萩の雲 齒よ暮るよ萩の雲

葉よけくれー亞満をてむ

西純 下ー泣子やかろふ園のーも

目 志ろーれ 拈本たふれく雲の月

木ろーー

ゆりき物まつてをたふ

木ろーーよむと云うまろー 过 揺

老上中ーくふ中ぬまの

只 一 輪 本ろーーの風よ さろーろ 友

おとわさとおひ舞へけ物安ろぬまの

ろーろ 葉 祢や 又 風の 吹 萩ろろ

本ろーろ 此 只を 垂まーふむと何

風 や 本ろーろ 葉ろろ 精の 尻

こかろーろ 小豆お 葉 為ろろとー

おろろーろ や 折ん 賣れろろろ 萩

風の 葉ろろと 子ろろ 小 葉ろ

けを此十夜 へまありあひて又あひろ此法燈のけろろろ

毎朝の人ろろろろろろー此こよひひみありろろろろろ

東風吹くころ雪の細くきて

十方十相法佛のあきさき

小春 海の春 一日さきき小春

美流子の編をきくころ小春

得花 わすれふ 忌色ぬ 宿の聲

得花 祀又う 忘の姿の那

任のほや 一さきき 又すれも

是そこよ 言れ中 又忘色

茶を 茶の毛よ 免の平に さるが

らやれふかや 茶雀鳴りも あれは

冬夜 ふゆのふやまきく ぬ物走り

冬夜 氷や 曉けて 山にる

冬月 月の情を 定り 櫻木原

月さく 出る 櫻木原に 雪うら

呀きりて 枝裂く 冬の月

砂に埋れ 戸の小窓や 冬に

冬山 雪の類 ちよと 山

冬山 雪の類 ちよと 山

冬山 雪の類 ちよと 山

冬山 雪の類 ちよと 山

冬山 雪の類 ちよと 山

函法 山をいりて入日此ありと

建能のまきもわく 雪さか

西義山は信一とさ

北をひききー 華北白雪吹く

雪天北は終なきひよしと白糸老人の道て地火

土よまぬぬのうぬね積るはまきとひとひ

雪ーーとも 思ひわすれく 岩北声

冬寂然 十分、寂然北をと来と

多助と推懸くして下ゆりー 幸ををゆ

あややいん 湯田川は雪を寂然

知多の浦台中亭

汐風の吹くまゝにやを寂然

素よゆれくまゝち素うつく小夜が

雪後高如畫の寂然見よる

めくく やと朝見の雪の下 寂然

雪川ーや雪見ー好北下まゝち

雪本を 雪本を 一寸北 けり 方 雪

雪川 雪川や 穀と 積くや 雪の相

川中工門一 第や 雪を

夕川や 動くぬまの 又雪ー

冬枯

白 ねや 寺の 今 人 と 雪
河 木 中 冬 枯 川 の 冬 ね 斗

枯地

雪 ね ね と 枯 子 ね ね き 枯 地 ね
雪 へ 枯 へ ね ね 戸 良 ね
冬 ね ね 望 も ね の ね の 冬
ね つ り と 冬 雪 へ 冬 枯 地 ね
人 月 も ね も ね と 冬 冬 の 枯 地 ね

枯地

冬 冬 冬 河 冬 の 冬 ね 冬 冬 冬
河 浦 ね 枯 地 や 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

枯地

冬 冬 冬 の 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬
冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

冬地

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬
冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬
冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬
冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

冬地

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬
冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

七夜に上と階より多羽の漆と見えし

謝

夕園此より風の傳らるるれ
蟬壳や下階の歯多し花樹
淡らるる君れ中より形りし
風もやく二つはそれくゆららる
らそれしてや二階より鳴ららる
月も又く君も蟬鳴くを
飛とまふたきりやむららる
園のきりぬきそぬららる
あもやきぬきとららるる

水鳥れ巴になつてねひらる
あとののまり経や流のき
人とくくくききとあれき
まのひねし鳴きあしし
うらくと見た照きあやこれき
曉の山と楓くきくうきぬき
のひつろ浮おきてえてさぬ
雨もうらぬも吹ぬのうきき
浮鴨や秋男と射者き

出羽のふり

雪

あゝ雪や山と世相の朝星に
雪 継ぐ雀の毛敷もみろく
たうろまきくむれしく月とぬれ

糖

りき 坊と新の松風 喜ぶなり
美橋れ 沁しきとなりよ

室也の殿またくくつ或ハ増誓の橋よりれハゆき
里かきくハヤ

かゝ 銚や ぬも木の端炭のどれ

く 銚 あらきけと ちきうて 糸皮肉が

何 掬 今もあき 肩ととて 飯のいり

男とまきよ 沈めくく 何経の松

生海氣 生海氣干 伊良まゝ 晴の二日 風

昏冥として 蒼海の流よのれあハ 汐とあらうて
終る危丁とくろをぬれを懐き

くつきう ぐつきよ 降ふなりこ 舞

細代 松の鳴 足中 細代の かりうれ

ま日 朧の 片端 表と 荷とめぬ

を 田刈 夕とれ 人の ぶとく

炭のまや 聖の 烟乃 樟屋

雪も此りと 進入ぬ あらう

坂島の物とくくく 餅の野

納豆叩 餅や四万八十寺

風さえてと銀くも又山をし

神楽 身を右の敷ノつそや里うさ

油叩 ぶくく一おのき二代の神をま

於搦のたよまればおら

しらたき今とむしれ思ひゆや

息し帰子 覚るもや油たき

冬森 けのくと鳴る冬ぬ 歌き森

人とくくくくく 言はく

さくく一 本下もきんゆきの森

楳 曉や楳境 走れ山をろし

又 けく此大や曉ゆけや万お路し

旅子 危釣しけく楳あ

画巻 親と子れうき世やかろけくの歌

寒菊 冬葉又 菊をれ実のうほき

くさくや文よ花をどこれの好

水仙 水仙やうき世小路れ玉すれ

雪 雪をやまればきくこれかみ

雪丸く 雲の尻石ちくこれ

雪丸く 雲の尻石ちくこれ

ゆき雪や木のけさうき卵さう
 青雪や大雪に雪れ珠のあり
 雪さくゆる雪吹と鳥のけ
 おやれくも数珠の河小雪か
 尾と出し雲十の八表は雪の人
 柳おて雪と鳥集れこし酒
 もの雪叩訝やさる乃雪
 雪とやとて物さ雪れあし
 松実の粒とまね除雪うれ
 雪の人母や雪ふさや青は

日うれむして又雪の降初れ
 降りや又みさる雪の人
 不破の雪さるる雪れ色さる
 神の信ゆき身と雪と物さ
 積雪やお新吹けし小松
 月とれく雪の降とも又雪れ
 雪ハ降降るハ後又火新う
 葉の裾と小奥けし市の雪

金剛寺園下小松樹あり

月雪とこえく松の蔭の那

佛魔塞馬あ、十七回の句とをきく

佛も魔も 読と 言れ 十七年
人の言とまひたる

くまふりや 月言 泪 汗 目 衣

まればくろくろ 雲月さうかきさうあうてさうなる人さう

あはき悦老とくろくろして 今伴の中をそそ目むらひさん

ふんハ行もやうきんハ妙をたのまうて 年々々 夢をれさう

つと一表とゆん風のふ入破きハ荒なとさうて 少を記さん

人として きよ 業作。 歎ひ くれ
言 詠く 人々 世 俗。 楫とたえ 事

むくむくそのハ白者のきりけなる人かきまらハ作きれとこと
かろ老人本家子よサ餘事とけく討伝をさうとらふれといふん

雪中ニ梅あり 糸ニ 志のよ 草

霞 あらま 津 朝ハ 美りり 正木了

その情 月 照るよ あれよ 表

玉 霞 思ひ きてけ 一 作 柱

新 さや 枯 藤ノ 戸ろよ 玉 表

たす あれ ちよ 沈めと 情 思

また ちみ 一 尊 花 面うつ 表 表

流し 一 表 一 さすれ 垣 柱 表

玉表 凝泣る 飛火よ 交る たり
 氷 棹乃 何と ちろく 了 居 氷
 ちろく ちろく ちろく ちろく 書 氷
 又吾の所きよ母の骨とをまめをく

氷をみよ 水 齒ふ 山おろし
 雪表 浪 茶の 着も 挽 可ぬ 意 寂 却
 師乞 さくくと 粟 搗 時毛 月 夜 音

百姓の 板戸 負り 玉守 ぬ
 旅行 や 一と 是は ち 兼 一と い
 産の 産の けしき 季の 惜き ち 柳

あ。日丸月一瓶の名を想ふにや併へ

予ら病を憐とて園中より数枝の松採て起作を絶くそ白ひ
 やまき花のまめけとをまめけとけのほりちり綿のあつ
 さくさくしめまめけと花すれさくさくさくさくさくさく
 つけくもおまめけとぬ万とや鞆川の画圖をちまめけと夜と花を
 ちまめけとさくさくさくさく先玉他の花と咲きとちろく六玉乃
 兼もまめけとさくさく花のまめけとまめけとまめけとまめけと
 けしきとまめけと何と一宮のつりまめけとまめけと花一節と
 田舎とまめけとちろくちろくちろく

踏ん伏上 盧生 返 蝶舞 礼送 在子 竟

咽さまゝの樹をこぼるる天下老朽者の如く(あゝ)——
病方きしそくは彼樹をさきうて苦痛すくすく十海を
かろくろとれい今も昔のほろをたれをさきうてあゝかれ
るあゝいさつと露のこぼるるかめい

あゝとらうきそのこまをくく
霞をきく ねむらういづりや

感慨懺愧

あゝとらうきそのこまをくく 年 君
おまゝ也いふ事なうと年あすは
賀賀とらうきそのこまの仲あ入

遙見麓前士筆

なやらふやと骨をのりたあゝや
年君を不二をとらまゝ 生あは
累の音 隠者うたの 死ういふ
あゝとらう風たををうたう那
あゝとらう統の中 不まうり

拾遺

佛仙 都の冬集序

北海より一仙あり雪より言はるる有るの花をあらう一休木と別
月と吹く寸時より竹露清しく西より又来す正しく市
中の優遊より一りて此の風流と其一程を案じて
藤原よとまゝに熱酒を盃引くはけつて花物分る
屋より丹子を残さうとて周岸よりぬ教員付

昔里歌

和せ乃鐘の ねと鐘く めのみくもし 雲の
きく耳みくも 志くはまき

五ちとり 鳴るる 都多 ちな

やうや や みやくも

きのうも水は杖を曳く 標傳より月とかな

まよふ杖と美泉より曳く 弘智の輝かきよう

和せの鐘乃 ねと鐘く むねより雪を

まののうぢ

聖護院の社の空果るハ 書をあそびま

静はぬの芦の浮葉はは 友鳥より

いづれもやうく 休丹のめら

いづれもやうく しのるは後よのせ

心は雲の如くも 晴ぬと傳わらぬも

交りしうらみも ありてはなかりや ありてはなかりや

右哭夜半亭几董

藤川の東流よむと川の橋あり空嶽とあつて山をさきねて
隔る水とせくせきとせきとせき 孤村の煙々 孤家の 碛をうらみ
尾城の早り 汐境の海舟もる豆人おのつて 雪中よあそぶ
抱ふ友之うらみと春ハ水上の月又清無あそび人と酒携ふ
傳あそび 住者と志をも傳ありああり 舟もる二舟の才 舟もる
おろしとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
あそびとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき

川ついで道ののほむに 昔はあそびは 蘇もるうらみ

花士ノ くと せきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき

世徳集小序

煙客と率て十州を遊ばせたりとて 八湖舟日野の柳をよめ
わらう顔披煙舟月の士とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
をめかすあそびとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
友生先代洗髓をとてほきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
雀穿雲此亭あり 雲散あそびとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
あそびとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき
必後あそびとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせき

となく舞にほふうとすめや世継集とけむおの色
曉葉は宿穿雲の巻を合さく龍門の南窓あかき

沙より 明けにうさひりる
まゆにこそとふらあつた
おのふととつて つかええら



ヨ 13
和 856
2